

〈怖い話〉が投稿される時

——2ちゃんねるまとめブログ「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない？」の定量分析を通して——

伊藤 慈 晃

1. はじめに

本論文は、〈怖い話〉と社会不安の関係性について明らかにするための準備段階として、2ちゃんねるまとめブログ「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない？」を対象として〈怖い話〉がいつ投稿されているのかを定量的に考察した。その結果、最も投稿数が多いのは8月だが、2月と5月にも投稿数が多いということが分かった。また、2004年5月前後に最も投稿数が増えていることが分かった。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

現代の社会を怪談という切り口から捉えようとした研究はほとんどない。しかし敢えて言うならば2つの流れがあるといえる¹⁾。1つはテレビ番組や映画、小説などのメディアを研究対象としたもの。もう1つは〈学校の怪談〉など、人々の間、地域に存在する話を研究対象としたものだ。

本論文ではインターネット上に集積された〈怖い話〉について研究素材とするが、その前にこの2つのスタンスを特徴的に表している研究について、やや中に踏み込みつつ取り上げる。というのも、それらを通して、社会との関わりから怪談を読み解く諸研究に通底する問題意識について確認しておきたいからだ。

テレビ番組や映画、小説などのメディアを研究対象としている研究としてここでは2つ取り上げたい。

まず金子毅(2006)は、公害病との関わりから、1950年代から1970年代までのメディアにおけるオカルトの変遷を辿った。1950年代、公害病がまだ原因

不明だった時期のオカルト作品では、身体的な奇異性に見られる〈怪奇〉が描かれた。1960年代に入り環境汚染が公害の原因と分かり始めた時期、〈恐怖〉が分化して描かれるようになる。“感染してしまうかもしれない”という不安が社会に蔓延していたからだ。1960年代後半になると、前者の外的なベクトルである〈怪奇〉は怪獣に、後者の内的なベクトルである〈恐怖〉は心霊現象に託されるようになった。そして1970年代にはそれらが怖いと感じられるものであると同時に消費の対象となっていった。

この研究の意義はオカルトが社会情勢を反映しているということを明らかにしている点だ。社会情勢とオカルト作品を丁寧配置する中からそうした事実を見つけ出し、更にオカルトのベクトルを外向きの〈怪奇〉、内向きの〈恐怖〉と区分した点は〈怖い話〉を研究する際の一つの指針となるだろう。それと同時にオカルトが消費の対象となっていった点について言及していることは、オカルト・メディア研究から現代の人々の心性について考察することの限界を示している。

その限界について石井研士(2006)は、1990年代から2000年代の心霊番組について研究から指摘している。石井は1995年に起きたオウム真理教事件を受けて、テレビ番組での超能力者や心霊番組の取り扱いが大きく変わったことから話を始める。それまで大々的に〈心霊〉や〈超能力〉という言葉で冠した番組が多かったが、この事件によってオカルト番組に対する風当たりが強くなり一年ほどそうした番組は放送されなくなる。その後、オカルト番組は、オカルト的な素材を“科学的に検証する”というコンセプトの番組へと、疑似科学化が進んだ。そして2000年代からは、それまで〈オカルト〉と呼称されていたものが〈スピリチュアル〉という名に再び言い換えられ視聴率を取るようになったことが明らかにされている。

石井はいわば放送倫理・番組向上機構や世論の度重なる重圧を避けながらもオカルト番組を作り続けたテレビ局の執念とでも言うべき態度を明らかにしたと言えるだろう。しかし一方で、近年、オカルト番組は明らかに減少していることについても言及している。石井自身は需要の多様性にその理由を嗅ぎ取っていた。しかしより直截には、テレビ局の提供する商品としてのオカルト番組の価値が、飽和状態に達したと言えるだろう²⁰。

そこで、次に人々の間、地域で口承されるモダン・フォークロアを研究対象

としたものについて、特にその代表と呼べるであろう<学校の怪談>について考察していきたい。

さて、そもそも<学校の怪談>がなぜ語られるようになったのか。この疑問に一柳廣孝(2005)は一つの明確な応答をしている。一柳は、1990年代に<学校の怪談>が膾炙されるようになった背景に、学校教育に相反する二つの役割が求められるようになったことがあるという。それは本来の学校の機能である社会的なルールを身体化するということと、一人一人の個性を伸ばすということだ。その結果、それまでは逸脱者とみなされてきた幻視力を持ったような生徒に対するまなざしに変化し、<学校の怪談>の主役として、同時に語り部として表舞台に立つようになった。しかし、小学校を舞台とした悲惨な殺人事件などが現実にかかる中で、<怖さ>を語っていた<学校の怪談>が徐々に減っていった。

これに対して、難波博孝(2005)は、そうした現実の恐怖が怪談を駆逐していくという認識は正確ではなく、「今も昔も学校の怪談が何らかの理由であるところにはあるがないところにはない。ただ、あるところにはなんらかの理由で減ってきている(難波博孝2005:92)」と修正している。難波は<学校の怪談>が減ってきている原因を探るべく、自身が大学生から集めた<学校の怪談>と、それらに対するメディアの影響を調べた。その結果、学校の怪談の約半数は、その土地に固有に伝わるものではなく、メディアの影響を受けたものであることが分かった。この事実から難波は、学校が本来持っていた<うち>としての場所性が失われたことを指摘する。<うち>とは、共同体に共有されていたイメージが継承されていく場所を言う。この<うち>の喪失は、凄惨な事件の恐怖よりはむしろ、学校運営者の“イメージの一新”と称してそうした記憶を削除しようとすることに起因するという。なぜならそれは、子どもたちが「自分のイメージを駆使し、どうすることが弔うこと=共同体を受け継ぐこと(難波博孝 2005:108)」を模索しようとする機会を奪うことでもあるからだ。

さて、この事実が示唆していることは2つある。1つは共同体のイメージを継承している<学校の怪談>が減りつつあること。今1つは、多くの学校の怪談はメディアから受け取ったイメージの影響が強くなりつつあるということである。これらは同時に口承されるモダン・フォークロアから社会の何らかの心性に迫ろうとした時に直面する課題でもある。

3. 本研究の狙い

以上、社会と怪談との関わりについて研究したものから先端的であろうと思われるものを幾つかを取り上げ、先行研究の現状について概観してみた。言うまでもなく、この他にも多くの研究ある。しかし、これらを取り上げたのは怖い話にメディア、あるいは口承されるモダン・フォークロアを研究することの意義と同時に、直面している課題についても考察してみたかったからだ。どちらの方法を取るとしても、商業社会、あるいは管理社会がもたらす現実という急流が、細々としかし連綿と語られてきた怖い話が生まれる場を押し流そうとしている様子が伺える。

これらの研究に通底している仮説の1つとして“怪談には社会不安が反映される”ということが挙げられる。前者はこの命題に対してメディアと社会情勢をリンクさせながらマクロな視点から取組み、後者は、逆に口承されるモダン・フォークロアをケースとして取り上げながらミクロな視点から取り上げた。しかし、下記の2点においていささか物足りない点も感じた。

第1に、これらの研究を仮に“怪談には社会不安が反映される”という命題に対する応答として考えた時、定量的に明確な根拠が提示されていない点だ。もしも定量的に何か確たるデータを提示することができれば、既存の研究が提示している問題群に対し、新たな評価を加えることもできるであろう。

第2に、＜怖い話＞の社会的な機能とでも言うべきものが消極的に評価されているのではないかという点だ。怪談に魅せられる人々が随分と昔からいるというには、ただ不安のはげ口というだけでなく、怪談にしかない社会的機能があるからなのではないか。

今回は第1の課題を乗り越えるための準備として、インターネット上で＜怖い話＞がどの程度語られてきたのかを明らかにする。そのために、2ちゃんねるのまとめブログ「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない？」(2013)の定量分析に取り組むことにした。

4. 「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない？」の概要

ここでは「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない？」(以下、「シャ

レコワ」と省略する)についてその概要について説明する。

「シャレコワ」とは、電子掲示板「2ちゃんねる」の怖い話スレッドのまとめブログの名前である。2ちゃんねるは日本最大の電子サイトだが、そこでは話題ごとに様々なスレッドが立てられ、匿名により書き込みがされる。通常、スレッドが最大容量に達すると“満スレ”となり“保管庫”にスレッドは移され、新しくスレッドが立てられる。この2ちゃんねるにおける心霊・都市伝説などに関するスレッドに書き込まれた投稿を各話毎に編集し蓄積したサイトが「シャレコワ」となる。2000年8月から現在に至るまで、粛々と投稿された怖い話が蓄積され続けている。

最後に、実際の調査結果と分析に入る前に確認しておかなければならないことがある。それは、怪談と<怖い話>の違いだ。ここでは<怖い話>とは怖さの主体が妖怪や幽霊である怪談と、変質者など生身の人間が主体となっている都市伝説的な話、それから、国家や企業の陰謀論的なものを包含しているものとして用いている。こうした<怖い話>の定義を広くとる理由は「シャレコワ」で扱われる話の広さに対応するためである。下記は「シャレコワ」の第1投稿文である。

1 名前：名無しさん@お腹いっぱい。投稿日：2000/08/02(水) 02:57

いろんな媒体で恐い話を聞きますけど、本当に恐い話ってあまりないですよ？

そこで、ここを利用してあなたが聞いた、または体験した、洒落にならないくらい恐い話を集めて、さらにそれを厳選して「究極の恐い話集」を作ってみませんか？別に実話でなくてもいいです。要は「半端じゃなく恐い」が大切なので。

それではみなさん、本から探すなり、友達から聞くなり、ネットで探すなりして下さい。

ここに見られるように「シャレコワ」に投稿される話には明確な定義はなく、「半端じゃなく怖い」という条件さえ満たされている話であればどういったものであっても投稿してよいとされている。そのため「シャレコワ」には上述したような幅広いバリエーションを持った話が投稿されている。蛇足にはなるが、投稿される内容について筆者の印象を述べておくと、9割方が怪談、1割弱が生身の人間が恐怖をもたらす都市伝説的な話、ごくまれに企業や国家の陰謀論

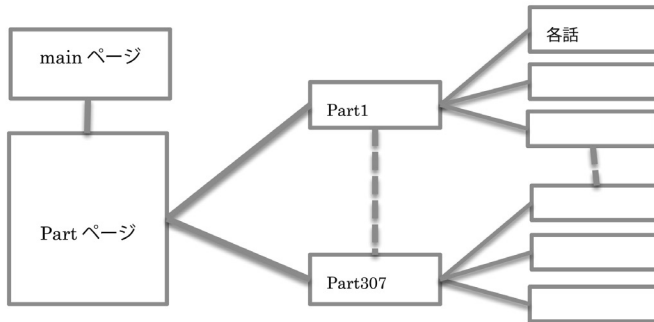
的な話があるといったところだ。

5. 本研究の調査概要

(1) 「シャレコワ」サイトの概要

「シャレコワ」の分析に入る前に、サイト構造について簡単に説明しておく。「シャレコワ」は日本最大の掲示板、2ちゃんねるに投稿されてきた投稿文をまとめたブログである。2000年8月に開設され、データの集計が終了した2012年11月20日までにPart305まで更新されていた。

mainページからはPartページを選択できるようになっており、各Partページには時期にばらつきはあるものの、50話前後が収められている。図1に簡単なページ構造を示した。



出所) <http://syarecowa.moo.jp/>より筆者作成

図1 「シャレコワ」のサイト構成

(2) データ抽出方法

データ抽出は、「シャレコワ」を対象にエクセルのVBAを用いて行った。具体的なプログラミング方法については割愛するが、大まかなプロセスについて記しておく。まず、エクセルから外部サイトに接続した。接続する単位はPart単位(プログラム上ではmenuと表記されていた)で行い、その直下にある各話をエクセルに抽出した。各話は、ID、タイトル、(時期によりある場合とない場合があった)、話の内容を列に抽出した。IDには投稿者の名前、ID、投稿日がまとめて出力されたので、列に抽出した後に、それぞれを分けて各セルに整

理しなおした。

データ欠損については2種類あった。1種類目は、プログラム上は存在するが実際のデータは空のものである。これについては、集計上問題にならないので、データを加工する段階で削除した。2種類目は、日付データの抜け落ちていたものである。これには menu79 (52 話), menu80(52 話), menu81 (20 話) の計 124 話が相当し、期間は 2004 年 7 月 15 日から 2004 年の 8 月 12 日までの約 1 か月間である。このデータ欠損について、今回はそのままカウントせずに全体の集計を行った。このデータ欠損は、データ抽出のミスではなく、「シャレコワ」管理者がサイトのデータ保管方法を変更したことによる影響である。というのも、この menu80 前後の時期はデータの格納ページの名前が頻繁に変更されているからだ。2004年までに「シャレコワ」への投稿数は大幅に増えていたため、8月の最も投稿数が増える時期を見越して、管理者側がサイトのデータ保管方法を模索していた跡が伺える³⁾。

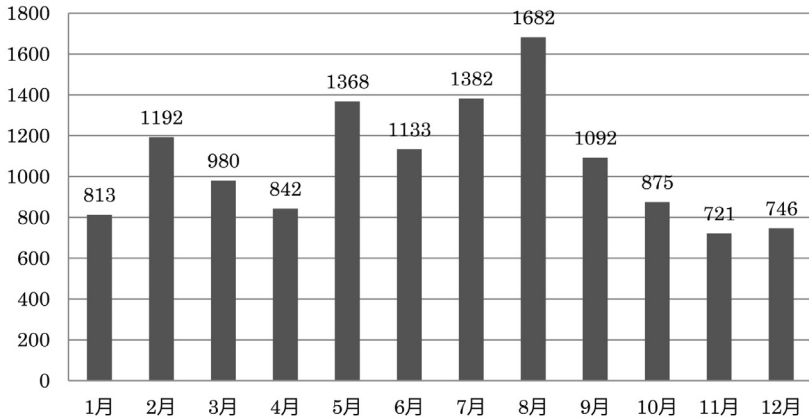
6. 調査結果

今回の調査では総投稿数、一話当たり平均文字数を変数に調べた。実際のデータの検証に入る前に、総投稿数と一話当たりの平均文字数、及び総投稿数と2ちゃんねる全体の投稿数との相関関係について述べておく(4)。まず、総投稿数と平均文字数についてはほぼ相関がないことが分かった($r=0.06$, $p<.001$)。また、総投稿数と2ちゃんねる全体の投稿数についても同様に相関がないことがわかった ($r=0.01$, $p<.001$)。

集計は「シャレコワ」が開設された 2000 年 8 月 2 日から 2012 年 11 月 30 日までの期間で行った。1 話を 1 件としてカウントした総投稿数は 13598 件、総文字数は 17283491 字、1 件あたりの平均文字数は 1260 字となった。あくまで平均値だが、概ね原稿用紙 3 枚程の長さで記述していることが分かった。これを多いか少ないかを判断するのは人によりけりだろうが、筆者の印象としては 1 つの短い話を丁寧に語るとおおよそこの位の分量になるであろうと思われる文章量だと思う。従って、ここに投稿されている話は、独り言のような散文的な内容ではなく、それなりに読者を想定して推敲を加えたものが多く投稿されているのだろう。

次に、投稿数について確認していく。“怪談はいつ語られるのか”という仮説を検証するために、まず確認したい前提は“怖い話は夏に語られる”という一般的に共有されている常識とでも言うべき問いである。総投稿数を月毎に集計してみた結果、最も多かったのは8月で1682件投稿されていた。次に多かったのが7月で1382件だった。次が僅差で5月の1368件、4番目には2月で1192件となった。このことから全体的に見た場合は夏に＜怖い話＞が語られるということが明らかとなった。

夏に投稿が増えるということについては一先ずは仮説通りということにしておく。しかし興味深かったのは、5月と2月の投稿数が4位と5位に入っていることだ。この月が多くなっていることは、学生層が大型の休みに入ることの影響だとも考えられる。しかし、2ちゃんねるの年齢別利用者層については30-39歳が28%、40-49歳が29%、19歳以下が16%、20-29歳が11%、50歳以上が16%となっている(ニールセン株式会社2008)。このことを考慮してみると、学生層の行動にだけ帰結を求めることはいささか早計ともいえるだろう。社会人も射程に含めた時5月と2月に共通することについて考察したい。まず、5月は“5月病”と言われるように、新しい年度、新しい環境が始まる4月の緊張感が緩まり、つい憂鬱になりがちな月だ。同様に2月は、新しい年が始まり、年末に残った仕事や新年の新しい仕事如山積みになって慌ただしい1月が



出所) <http://syarecowa.moo.jp/>より筆者作成

図2 シャレコワ月別投稿数

過ぎ去り、なんとなく上の空になることが多いだろう。そうした“なんとなく身が入らない”，“なんとなく憂鬱だ”と曖昧なやり場のないネガティブな気持ちだが、人を＜怖い話＞へと誘い込んでいるように思える。

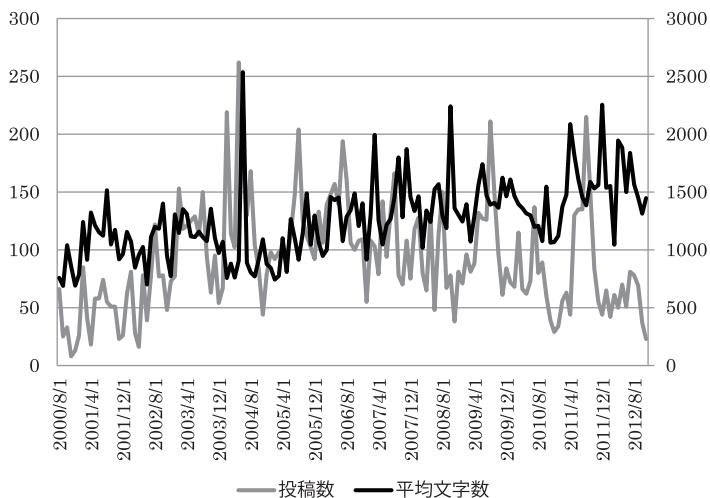
投稿数と平均文字数の時系列変遷

次に、投稿数と平均文字数の時系列変遷に注目する。まず、投稿数については、運営が始まった2000年は50件前後で推移していたのが、2006年8月頃には100件前後にまで上昇している。その後、2012年にかけて緩やかに下降を続け、再び50件前後になっている。しかし、開設当初と違う点は年間を通しての投稿数の差が開いている点だ。こうした現象は全体的な閲覧者の行動パターンの変化に起因していることと思われる。開設当初は認知度も低く利用者は比較的2ちゃんねるに精通している者か、或いはコアな＜怖い話＞好きの人が多かったと推測できる。それが話の蓄積数や、“殿堂入り”の話の蓄積数が増えてきて「シャレコワ」の提供する話が充実するにつれて、より一般的な閲覧者層が増えた。彼らは年間を通して定期的に閲覧するというよりは、夏に怪談話がテレビなどで取り上げられる頃にその延長で「シャレコワ」を閲覧したり、あるいは書き込んだりするのだろう。そうした閲覧者の質的な変化がグラフに反映されているように思える。

一話当たりの平均文字数は、概ね開設当初1000字前後だったものが緩やかに上昇を続け1500字前後になっている。投稿数の閲覧者の質的な変化を表しているのに対して、平均文字数の変化は、投稿される話の質的な変化を物語っていると考えられる。初期の話と近年の話を読み比べてみると、初期の話が構造としてシンプルなものが多い。幽霊を見たという話なら、幽霊をどういう状況で見たのか、その幽霊がどんな様子だったのかだけが語られる。それに対して近年の話は、幽霊を見た話であれば、それを幽霊としか考えられないことの具体的な根拠や、その幽霊がなぜ現れたのかという原因といったディテールも細かく描写されている。そうした話の質的な変化、換言すれば「シャレコワ」の中で語られる＜怖い話＞の文法とでも言うべきものが形成されてきているのであろう。

次に投稿数・平均文字数が最も多くなった時期について見てみると、投稿数は2004年5月に262件、平均文字数は2004年6月に2536字となっているこ

とが分かる。〈怖い話〉が多く語られるのは全体で見たら8月が多かった。



出所) <http://syarecowa.moo.jp/>より筆者作成

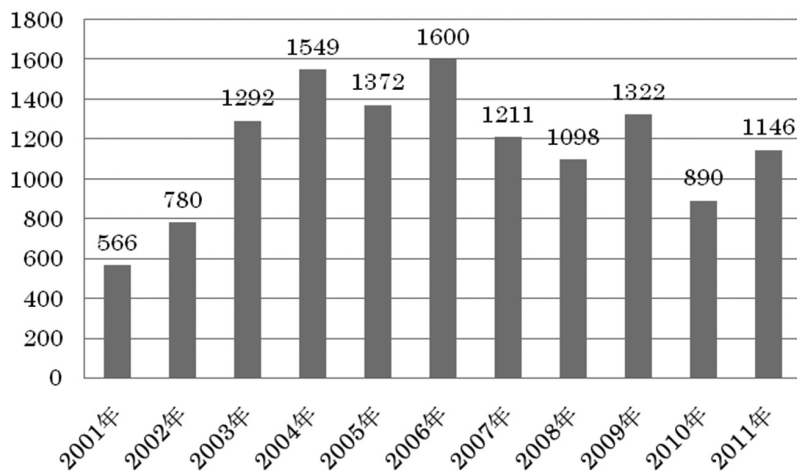
図3 投稿数・平均文字数の時系列変化

この要因を考察するにあたって、まず考えられることとして、「シャレコワ」での活動が2004年にピークだったのではないかという仮説だ。年間の総投稿量の推移を見てみると、2004年から2006年にかけて最も「シャレコワ」がサイトとして活発だったことが分かる。従って、「シャレコワ」の活動がこの2004年に非常に活発だったというのは要因として考えられる。しかし、5月の平均値が124件だったのに対して262件だということを考えると、2004年5月の投稿数は突出している。従って、サイトが活発だったということだけでは説明として不十分な様に思われる。

そこでこの時期、社会でどんな出来事があったのかを調べてみた。すると、2001年1月25日には当時中学3年生の男子が両親から虐待を受け餓死寸前にまでなった岸和田中学生虐待事件、同年4月はイラク日本人人質事件が、同年6月1日には佐世保小6女児同級生殺害事件が起きている(Wikipedia, 2012)。これらの事件は当時メディアでも何度も取りざたされていたことを考えると、そうした出来事を知ったことによる反動として〈怖い話〉を読むという行為を取らせたということが考えられるのではないだろうか。

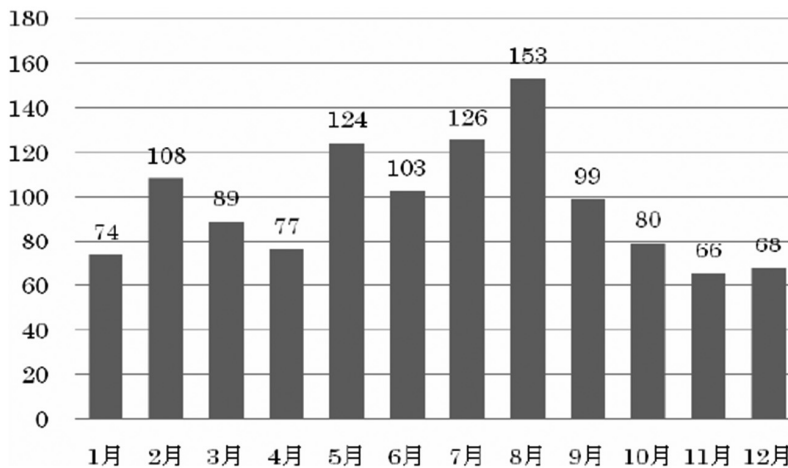
7. おわりに

本論文では、<怖い話>と社会不安の関係を明らかにするための準備段階と



出所) <http://syarecowa.moo.jp/>より筆者作成

図4 年間投稿数推移



出所) <http://syarecowa.moo.jp/>より筆者作成

図5 月別平均投稿数

して、〈怖い話〉がインターネット上でどのくらい語られてきたのかということについて、「シャレコワ」の投稿数・平均文字数の変遷について定量分析を加えながら明らかにした。これまでの〈怖い話〉研究の領域ではこうしたインターネット上で語られている話にスポットを当てたものは全くなかったため、その全体像について明らかにできたことは本論文の1つの意義であろう。ただ、今回の結果はあくまでその概要を把握するものであり、〈怖い話〉と社会不安の関係についてはその片鱗を垣間見られただけで、エビデンスとして確たるものを提示できたとは言い難い。今後は今回得られたデータをより精緻に分析していき、〈怖い話〉と社会不安の関係について追っていきたいと思う。

【文献】

- 東雅夫, 2005 「『学校の怪談』に始まる—1970年代ホラー小説ブームと都市伝説の関係をめぐる—」一柳廣孝編『「学校の怪談」はささやく』青弓社, 15-28.
- 石井研士, 2007, 「霊のいるトコロ」一柳廣孝・吉田司雄編『霊はどこにいるのか』青弓社, 114-27.
- 金子毅, 2006, 「オカルトジャパン・シンドローム—裏から見た高度成長—」一柳廣孝編『オカルトの帝国 1970年代の日本を読む』青弓社, 17-36.
- 2012, 「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない?」, (2012年12月29日取得, <http://syarecowa.moo.jp/>).
- 難波博孝, 2006 「『学校の怪談』がなくなった後で」一柳廣孝編『「学校の怪談」はささやく』青弓社, 87-112.
- 2012, 「2004年」, Wikipedia, (2012年12月28日取得, <http://ja.wikipedia.org/wiki/2004%E5%B9%B4>).
- ニールセン株式会社, 2008, 「発言小町, 月間一人当たり利用時間に注目」Nielsen Online REPORTER, (2012年12月28日取得, http://www.netratings.co.jp/email_magazine/2008/09/NNR20080901.html).

(1) 怪談研究の流れについては、香川雅信「妖怪研究の現在」一柳廣孝・吉田司雄編『妖怪は繁殖する』青弓社, 2006年, 218-38がよくまとまっている

(2) これらは共に〈オカルト〉についての研究だが、筆者の研究対象である〈怖い話〉もオカルト

>の1カテゴリーに入ることから、参考としている点は留意して頂きたい。

- (3) 例えば、それまでページ名の拡張子は「.htm」だったが、この時期から「.html」に変更されている。また、ページ名自体もそれまでは「menu072.htm」といった形で統一されていたのが、「77/index.html」や「81/newpage5.html」などのようにばらつきが出ていた。「menu82」以降は「82/82.html」といった形で統一されている。サイトからデータを抽出する際には、こうした元データの格納方法も斟酌しながら行った。
- (4) 2ちゃんねるの投稿数については2012、「2ちゃんねる熱いスレッド」(2012年12月28日取得, <http://stats.2ch.net/kawaseki-d/2ch.txt>)。に2004年5月からの投稿数が記録されていたので、それを参考にした。